

## 被災者に聞く — その時、私は —

# 『何でもしますよ』という言葉 人の輪ってすごいなって思いました

林 はやし  
いく子 やました さん (山下区)



山元町の「老人憩いの家」でボランティアをしていた林いく子さんは3月11日の午後2時46分の最初の揺れの時、施設建物の中にいた。利用していた高齢者全員が迎えに来た家族と一緒に帰宅したのを確認し、ボランティアへの帰宅

許可が出たため、家に戻ってみた。海の方にある家に車を走らせると、海の方から山の方に向けて次々に車が走ってくる。避難が始まったのを知った。自宅に着くと、近所の人が集まっていた。「なんか、津波が来るらしいけれど

も、ここまで来るはずはない」そんな会話をしていたが、林さんは「そんなこと言わないで。みんなで逃げるんだよ」と声を掛けて回った。

### 避難準備をしている途中で水が来てしまった

自宅では病気の夫が休んでいた。避難することになるだろうと思った林さんが車に毛布を積んでいると、近所の人「津波が来たよ」と大声を上げながら走ってきた。気が付くと50センチぐらいの高さの波がさわさわと流れてくるのが見えた。

「水が来た!」

そのまま駆け込んできた近所の人と夫との3人で必死に二階に上がった。間もなく津波が押し寄せてきた。間一髪だった。家の窓の外は一面の海。シューシューと音を立てるガスボンベや物置、クラク

ションが鳴りっぱなしの車。大量のがれきと水でいつぱいだった。林さんは無我夢中で東京で仕事をしている息子や娘に「津波が来てる」と携帯電話のメールでSOSを発信した。

車が次々と流されてくる中で、車の屋根に人影のようなものが見えた。夫は「助けに行くといい、林さんは「行かないで、死んだら困る」何度となく同じやりとりが続いた。車の上の2人からは「助けてくれ」「死んでしまおう」と悲痛な叫び声が続いていた。「今、いろいろしているから待ってください」林さんも必死に声を掛けた。「本当に苦しくて、助けられなくて。自分たちの命はあるのに、あの2人をどうやって助けたらいいか分からなくて」当時のことを思い出して、林さんは涙を浮かべた。

どのぐらいの時間が経ったのか分からないが、遠くから「誰かいませんか」という声が聞こえてきた。外を見ると、消防士がボートを引っ張って林さんの自宅のそばまで来ていた。「俺です」林さんのもう一人の息子は消防士をしていて、偶然にもその息子の同級生が救助作業で来てくれたのだ。林さんは、車の上で避難している2人のことを話し、「私たちは大丈夫。うちの前を行ったところの車の上に生きている人がいるから、そこに先に助けに行つて」

その後、息子の同級生の消防士が二人を無事救助してくれ、林さんの家に連れてきた。80代の高齢男性とお嫁さん。着替えをさせ、全身をマッサージすると、少しずつ元気を取り戻した。その夜、水が引いてくると、救急車が来て林さんたちは全員救助され、中央公民館の避難所に移った。

### 避難所の環境改善に尽力 その後、虹の会を結成

中央公民館ではたくさんの

人が避難しており、生活環境が日に日に悪化していた。特に大変だったのがトイレ掃除。水が出ないのにトイレを使うために詰まって悪臭を放っていた。ボランティアの経験の長い林さんは、炊き出しで使った水や物を洗った水をためてトイレに使ったり、せつせとトイレ掃除を続けた。

震災から10日ぐらいすると東京在住の娘と息子たちがレンタカーで駆け付けてくれ、一緒に東京に行つて、そこで避難生活を送った。東京から戻ると仮設住宅に入居した。それでも時々自宅に戻つたりしていた。

すると近所の人から「みんなで集まってみない」という声掛けがあったり、支援物資を融通し合うようなこともあり、グループを組んで活動してみたいという声もあった。そこで林さんは、60代から80代の仲間と一緒に「虹の会」というグループを結成した。

「虹の会」は地域の草刈りやドブさらいなどのほか、女性

を中心とした「乙女の会」が手作業でエコたわしを作つて販売することも始めた。エコたわし作りを始めると、みんなが夢中になる。「一緒にやつていて楽しい」と言ってくれることもうれしくて、その時間がとても楽しいという。

### ボランティアへの感謝の気持ちを忘れずに地域の活動を続けていきたい

生活再建の時期、山元町にたくさんのボランティアの人たちが来たことも、林さんにとっては人の温かさ、優しさを感じられる体験だったという。「いろんなお手伝いをしてもらえて、声も掛けてくれて。『何でもしますよ』って言っていただけこのありがたさ。人の輪つてすごいなって思いました。若い人には言いません。『あなた、帰つたらさ、仕事なかつたり食べ物なかつたりしたら、どうするの?』って。でもそういうのを投げうつてきてくれる。日本人も海外の人も捨てたもんじゃないと近所の人とも話したりしました」今後も支援で来てくれた

ボランティアの人たちとはずつとつながっていたいと考えている。

「あまりにも知人や友人で亡くなった人が多く、一瞬にして物事が変わるといふ体験をしました。これからのことを考えると、やはり防げることは防いでいきたいと思いません。そして、もつと安全に、もつと楽に暮らしたいと思えます」と林さん。

地域の活動をつづけながら、人と人とのつながりを大切に過ごしている。



山下区内の様子 (2012.11)

## 被災者に聞く — その時、私は —

### 車に乗り込んだその瞬間 フワッと浮いた感じがしたのです

「焦りとかパニックとかは  
なかったけれど、『えーっ、人  
って簡単に災害に巻き込まれ  
るんだな』って、そう思ってい  
ましたね」西石山原仮設住宅  
で避難生活を送る中川時子さ  
んは、津波で車ごと流されて  
いった時の気持ちをそう話し  
た。

渋滞する車の列を見て  
避難しなければと気づいた  
海から2、3キロほど離れ  
た高瀬地区の自宅で、85歳の  
母親ミヨコさんと二人でいた  
時に強い揺れが襲った。食器  
棚のガラスコップや皿などは  
飛び出してきて割れた。余震



が続く中で中川さんは、家に  
閉じ込められないように出口  
の戸を開けて安全確保をした  
あと、隣近所だけが人が出て  
いないか無事を確認しようと  
隣近所の6軒の家を回った。  
近所の人たちと「大丈夫だっ  
た?」「良かったね」と確認し  
た後、自宅の前の道路を見る  
と、避難する車で大渋滞して  
いた。列の最後尾で運転して  
いた人が「もう津波が来るか  
ら、早く逃げなさい」と叫んで  
いた。それを見て初めて、中川  
さんは「避難しなければなら  
ない」と思った。「自分の家が  
沿岸部だっという意識がなか  
ったですね」と振り返る。

母親を自分の車に乗せよう  
と、車に乗ってエンジンをか  
けたところ、車がフワッと浮  
いた感じがした。見ると津波  
がすでに押し寄せてきてい  
て、車が水の上に浮いていた。  
玄関を出ようとして靴を履い  
ていた母親は、津波で家の中  
に押し戻された。中川さんは  
水に浮いた車と一緒に流され  
ていった。自宅の周辺の地区  
で水に浮いたままあちこちに  
流され、最後は焼却場の松の  
大木に前輪が引っ掛かって止  
まった。

たまたま車の中にあつた雪  
かき棒を使って水の深さを測  
ってみたが、棒の先が地面に  
届かなかつた。相当に深いこ  
とが予想された。それでも近  
くに道路が見えたので、何と  
か脱出できないか、水の中を  
道路まで泳いで行けば逃げら  
れるはずだと、一度、車の外に  
出てみた。すると予想以上に  
水は深くて、あごまでズボツ  
と水に入ってしまった。そこ  
で必死に車につかまって再び  
車内に戻ったが、体はびしょ  
濡れで異常な寒さが襲ってき  
た。その間も、近所の人があ  
家の二階ごと水の上を漂流してい

なかがわ  
ときこ  
中川 時子 さん (高瀬区)  
たかせ

くのが見えたり、「早く来てくれ」という誰かの大声も聞こえてきた。

「私も何回か言ったのですが、誰にも聞こえなかったのではないかと思います」

その間、木につかまって浮いたまま、引き潮に流されていく人を何人も見た。手を伸ばせば届くような距離にあると思っても、水の流れがとて速くて、どうしても捕まれない。「頑張れよ」「頑張つて」と声を掛けて励まし合いながら流れていく人を見ていた。「あの時のことを思い出すと、何とか助けられなかっただろうかと思えます。それが一番悔いの残ることです」と中川さんは語る。後で、何人かは助かったと消防の人から教えてもらった。

### 水の中を必死で歩いて 消防団に救助された

夜10時近くになり、中川さんは再び、雪かき棒を出して水の中に刺してみるとだいぶ水位が下がっているのが分かった。まだ胸ぐらいの高さまで水はあったが、ずぶ濡れ

になりながら裸足で必死に歩き、何とか道路にたどり着き消防団の人に助けってもらった。その後、高瀬地区の避難所になっていた多目的公会堂に入ったが、猛烈に寒さが襲ってきた。周囲の人にマツサージしてもらったが、2時間は震えが止まらなかった。「その時でもまだ自分が大災害に巻き込まれているという感じがなくて。おばあちゃんがいる家に帰らないと、職場にも連絡しないと、そんなことを考えていました」

母親のミヨコさんは津波で家の中に押し戻された後、必死に二階に上がり、ベッドの中にわずかに残っていた湯たんぽの温もりを頼りに一晩を過ごしたという。中川さんの夫が出張先の山形から発災の日の夜中に駆けつけ、中川さんと、ミヨコさんと無事に再会することができた。3人はその後、中川さんの実家のある福島県新地町に避難し、6月になって仮設住宅に移った。

### 困難の中で事業を再開し 生活の再建を目指す

中川さんは、肥料など農業資材を扱う会社を営んでいたが、3月の決算期を前にたくさん仕入れていた資材とともに事務所建物も流されてしまっていた。その後は、資材置き場として坂元地区に倉庫を借り、事務所は新地町に借りて事業を再開した。山元町と新地町を行ったり来たりしながら仕事をしている。

中川さん一家の現在の目標は、自宅と事務所の再建。娘の夫の実家が木工で、すでに新しい自宅と事務所の設計図は出来上がった。ところが気がかりが持ち上がった。発災以降、不通になっているJR常磐線の再開に向けて線路の変更計画が高瀬地区で持ち上がっていることだ。もしかすると中川さんの自宅敷地の一部が、新しい路線にかかる可能性もあるという。2012年の6月にJRが測量調査をし、その後連絡はないものの、杭が立っているため、計画に引かかる可能性が残る。そのため、自宅の再建はまだ先になりそうだという。

「兄弟や親戚、子どもたちがいろいろと世話をしてくれたのが、ありがたい。おばあちゃん、震災前はラッキョウを作ったり野菜を作ったりしていたのに、前のように畑仕事ができないのをさびしがっています。でも新しい家を建てる時には、おばあちゃんがひなたぼっこをしたり編み物ができる広い縁側を作る予定です」自宅の再建後の新しい生活への希望を持って、仮設住宅での日々を送っている。



高瀬区内の様子(2012.11)

## 被災者に聞く ― その時、私は ―

仲間と一緒にイチゴを作り  
一日も早く産地を復興させたい

合戦原区の菅野孝雄さんは  
発災当時、イチゴの選果作業  
の真っ最中。大きな揺れに驚  
いて外に出たが、家は瓦が落  
ちたぐらいで、直後は電気が  
来ていた。急いでテレビをつ  
けると「大津波警報」が報じら  
れていた。当時、自宅には92歳  
の母親と菅野さんの妻、学校

から早く帰ってきていた高校  
2年の孫がいて、3人は赤坂  
住宅の高台に避難した。  
次に頭に浮かんだのが、町  
農産物直売所「夢いちごの郷」  
で働く女性たち。「レジのおぼ  
ちゃんを最初に逃がさなきゃ  
だめだ」すぐに車で行き女性  
を避難させた。そのあと、保育

所の2歳の孫、小学1年生の  
孫を次々に迎えに行き、車で  
自宅に帰ってきた。途中、海  
南側の方角から煙が立ち上っ  
ているのが見えた。山全体が  
煙に包まれているようだった。

消防団と一緒に  
流された人を救出した

間もなく、高台の方から「津  
波だ、逃げる」という人の声  
聞こえてきた。「声は先に避難  
した女房だったと思う」と菅  
野さんは当時を振り返る。息  
子とその妻は孫を連れて高台  
まで走ってすぐに避難した。

車を持って行こうと、一旦  
は自宅に戻ったが、直線であ  
る500メートルぐらい先にあ  
る数件の民家の方向から津波  
が来るのが見えた。JR常磐  
線のレールやイチゴのハウス  
が流されてくる。後ろを振り  
返ることもなく、必死に高台

かんの  
たかお  
菅野 孝雄 さん（合戦原区）  
かっせんはら

に逃げた。背後から「バリバリ  
バリッ」と雷が落ちたような  
ごう音とともに津波が追いか  
けてくるのが分かった。

「だいたい高さは6メート  
ルぐらいの高台まで全力で  
走って、息が切れて立ち止  
まって、でもまた走って。俺が  
最後だったね。後ろには誰も  
いなかった。津波はどこまで  
くっかわかんないからね。登  
れつとこまで逃げたね」

高台に上がると、避難して  
きた人が「ロープ持ってきて  
きた人が「ロープ持ってきて  
と騒いでいた。津波の方を見  
ると、常磐自動車学校に通っ  
ていた若者が、顔だけが見え  
る状態で津波に流されてき  
た。ロープを投げると、若者が  
しつかりとつかまった手応え  
があった。消防団も一緒に  
なって全員で若者を救助し  
た。若者は高校を卒業したば  
かりの18歳の男性で、全治3  
か月だったが無事助かった。

## 全てが流されて 何も残っていないかった

菅野さん一家は合戦原の避難所でその夜を過ごした。一緒に避難生活を送ったのは100人ぐらい。地域の人が食べ物や布団を持ってきてくれた。それでも津波の直後でもあり、その夜はほとんど眠ることはできなかった。

翌朝、菅野さんは津波が上がってきた水際まで下りていき、家のあつた方角を見てみた。津波で押し寄せられたがれきで家の前まで行けなかったが、家も、イチゴのハウスも、全てが流されていた。4、5日後に自宅まで行くことができたが、家の基礎部分でかろうじて場所が確認できた。一本の木も残っていなかった。後で、近所の方が4人亡くなっているのが分かった。まだ津波が来る前にたまたま会い、「地震の後片付けすんだ」と会話した友達も含まれていた。

震災後、仮設住宅では8人家族全員と一緒に生活できる環境ではないことが分かり、

まずは母親は町内の妹の家に、嫁と孫3人は青森の嫁の実家に避難させた。その後、地元の区長に依頼して、貸家を探してもらった。発災から20日後の2011年3月末、みなし仮設住宅となった民家に移り、現在は家族水入らずで生活している。

## 様々な支援を受けて イチゴ栽培を再開できた

まだまだ落ち着かない日常だったが、5月ごろから息子たちとともにイチゴ栽培の再開に向けて準備に入った。

「俺だってもう65才、息子も42才。よそさ行つて何かするのにはちよつと遅い。俺らとはかくイチゴしかできねんだ、と。とにかく、イチゴやっぺつて」家族会議の末の結論だった。

現金収入も必要だったため、息子はダンプの運転、息子の妻は役場の避難所の給食担当などで仕事を始めた。菅野さんと妻はイチゴ栽培の準備。蔵王町に畑を借りてイチゴの苗作りを始めた。

息子の友人から塩害のない

畑を借りて土地を確保し、各地から来たボランティアや農協の青年部会の力も借りてハウスの建設に着手。ボランティアは県内だけでなく全国各地、海外からもミャンマーの支援を受けた。ミャンマーからも僧侶が来てお祈りをしてくれた。こうした人たちとの交流が縁となり、その後、菅野さんはミャンマーの仏教協会から感謝状を受けた。

一番最初のイチゴ収穫時期は、定植が遅れたためにクリスマスになった。最初に採れたイチゴは、これまでのお礼の気持ちを込めて、お世話になった人に次々と配った。イチゴを見て喜んでもらえたのが何よりうれしかったという。

現在は家族ぐるみでのイチゴ栽培を再開させている。

「とにかく周りの人たちがいい人ばかりで。人の巡り合わせが良かった。何か相談すると真剣に聞いてくれるし、一生懸命手伝ってくれた。地域だけでなく、全国、海外から来たボランティアさんの力も

大きかった。とにかく、いろんな人に100%助けられて今、こうして何とかやっっている。俺らだけでは何も進まなかった」と周囲への感謝を語る。

最後に防災に備えた教訓を伺った。

「大きな地震がきて、津波が来るかもしれないとなつたら、とにかく逃げるのが一番大切。『今までは大丈夫だったから』『今までも津波は来ないから』という話はもうできないね」と語る。



合戦原区内の様子(2012.11)

## 被災者に聞く ― その時、私は ―

流されながらも  
生きていく事を確認し合ったさいとう  
としあき  
齋藤 敏明 さん よしえ さん 夫妻 (町区)  
まち

住民の安否確認中には

に、坂元地区の自宅で過ごして

津波の話は出てこなかった  
日だった。齋藤敏明さん、よし  
えさん夫妻は2人の孫と一緒た。突然の大きな揺れで、  
敏明さんはとっさに時計を見  
た。揺れが収まるまで6分か  
かった。「この6分のうちに少

なくとも2種類の地震  
が起きた。南北に揺れて  
いたのが、今度は縦と  
横、そして上下左右に揺  
れてきた。震源地は、2、  
3か所はあると思った」  
と敏明さん。茶だんすが  
倒れないように抑える  
敏明さんと、孫2人を抱  
えたよしえさん。揺れが  
収まると互いにホッと  
して「大丈夫、大丈夫」  
と安否を確認した。テレ  
ビをつけると「津波の高  
さは3メートル」と報道  
していた。すぐ停電にな  
り、テレビは切れた。

敏明さんは地域の救  
護班のため、住民の安否  
確認に出た。地震で倒れ

た仏壇を整理している人、一  
人暮らしの高齢女性、断水に  
なつて井戸掃除をしている人。  
無事を確認して「またあとで  
来るから」と声を掛けて回つ  
た。障害を持つている人に声  
を掛けても応答がなかったが、  
後でこの時点ですでに避難し  
ていたことを知った。家々を  
回るなかで、津波の話は全く  
出なかった。敏明さんが近所  
を回る間に、2人の孫は母親  
がきて連れて帰っていた。よ  
しえさんはその時、防災ずき  
ん2枚を孫にもたせ、自分も  
かぶつて家の中の片付けに取  
り掛かった。

敏明さんが真南の海の方角  
を何気なく見ると、常磐自動  
車学校がある方向に蜃気楼(し  
んきろう)のような真つ白の  
霧が立っていた。見ていると  
コーヒー色の壁が向かってき  
ていて、大きな松の木が倒さ  
れ、はねかえつて水しぶきが

上がっていた。驚いて「津波  
だー。2階に上がれー」と叫ん  
で、家に駆け込み、よしえさん  
と一緒に2階に上がった。テ  
ラスまですでに津波が来てい  
たので、渡り廊下で母屋とつ  
ながった物置の3階に2人で  
駆け込み、先にながったよし  
えさんは津波に引きずり込ま  
れた。

流されたがれきの上で

震えながら一晩を過ごした

バリバリバリバリ…。もの  
すごい音とともに建物は壊れ  
た。流されるなか防災ずきん  
をかぶつたせいとか、よしえさ  
んは浮いては沈みを二、三回  
繰り返しているところを、敏  
明さんは「手を伸ばせー」と声  
を掛けてよしえさんを引き上  
げた。

そのまま物置ごと流されて  
15分ほど、がれきの上に乗つ  
て止まった。敏明さんは

その顔をケガして前歯も欠けたが、お互いが生きていることを確認し合った。

「一面海と化した信じがたい光景の中を「助けて下さい」と流されていく女の人がいたが、結構離れているし助けようがなかった。「がんばってねえ」としか言えなかった」と、よしえさんは言う。

周囲はまだ水が深く、次第に暗くなっていった。姿は見えないが「おい、おい」と聞こえてきた。2人も「おい、おい、がんばろうね」と声を掛けあった。

そのうちにヘリコプターが旋回を始めた。叫んでみるが、気付いてくれる気配はない。仕方なく棒を見つけて旗のよいうな物を作って振ってみたりもしたが、救助は来ない。

2人はこの夜は救助は来ないとあきらめて、そこで休める所を考えた。近くに濡れているが畳を見つけて落ち着ける場所を作った。水は少しずつ引いて行っているようだったが、全身ずぶ濡れで寒さが襲ってきた。最初は2人で抱

き合って寒さをしのいだが、背中が寒くて仕方がない。そこで背中合わせで座ったり、物置ゆえ座布団5枚入りの一包みとトイレットペーパー2袋を見つけた。トイレットペーパーをほどいて体に巻き付けたり、カッターで座布団を切り裂いて、中の綿を体に付けたりした。

時々、「高いところに避難してください」というような放送が聞こえてきた。ゴオーつという地鳴りも聞こえてくるが、水に浮いている状態であったため揺れは感じなかった。「また津波が来るんだな」そんなことを思い、寒さに震えながらその夜をすごした。

翌朝明るくなってまだ周囲には水があったが、よく見ると道路の上に自分たちが引つかかっていることが分かった。とにかく脱出することを考えた。ケガから足を守るためトイレットペーパーが入っていたビニール袋を足にかぶせたり、防災ずきんを足にかぶせたりして、何とかがれきの山から下に降りた。歩いていく

うちに国道6号線で知り合いに会い、避難所まで乗せてもらった。敏明さんは着くなり、町の職員の人に消毒液を渡された。鏡を見ると顔中が血だらけになっていて驚いた。

### この教訓を生かして 前向きに進むことが必要

何もかも流されたが、北海道、青森、南は横浜や静岡の友人、知人が次々に衣類や生活物資を送ってくれた。早い時期に高瀬字合戦原に貸家を紹介してくれる方もいて、一軒家に入居し、知人からはただ同然で車を譲ってもらった。

敏明さんの自宅があった町区1班では、毎年11月、芋煮会を兼ねて炊き出し訓練をしていた。「発電機など防災物資もそろえてあり、停電があっても断水があっても大丈夫という体制を取っていた。

しかし今回は全てが一瞬に流されてしまった。何の役にも立たなかった。しかも、津波が南から来ているのに、南側(坂元中学校)に向かつて避難

して犠牲になった人もいた」という。

「私は救護班という頭があつて、安否確認に夢中になっていた。結果論だが、逃げろつて言えば地区の人は助かった」と敏明さんは唇をかみしめる。「もうとにかく地震が発生したら逃げる。高いところに逃げる。そして自分自身で身を守るという意識も大切」と2人。

敏明さんは満州からの引揚者。震災後、思い出サルページで回収された写真の中に、自分の写真を探しに行った時、満州から引き揚げてきた時に背負っていた父親の手作りのリュック2つを並べて写した写真があるのを真っ先に発見した。リュックは我が家の宝物だったので、この思い出の写真だけでも津波の後に戻ってきたのが本当にうれしかったという。

「いい人にばつかり会えて、俺は世界一幸せな男だと思ふよ。結局、後ろを向いてはダメだよ。前を向いて、とにかく目標を持って進むことだね」



## 被災者に聞く — その時、私は —

### 自分も元気を出して 山元町民のために活動していききたい

まのめ  
間野目 貞夫 さん (磯区)  
さだお

「30年前に建てた工場が一瞬で流されてしまった。でも自分の力でできるだけ立ち上がりた」と踏ん張った」

発災当日、間野目さんは坂元駅から踏切をわたって県道を右折し、自分の工場に戻ろうとしていた。町の交通指導隊の副隊長を務めていること

から、友人の息子を新隊員として勧誘、了解をもらって車を運転して帰るところだった。

「揺れ始めたとき、タイヤがパンクしたかなと思った。でもだんだん尋常ではない揺れになっていった。電柱が倒れ、マンホールは道路から飛び出し、道路のアスファルトがセ

ンターラインのところで20センチぐらい盛り上がりつつあった」と当時の衝撃を語る。

**防波堤を越えることは  
ないだろうと思っていた**

経営する自動車整備工場の事務所に着くと、地震は収まっていた。妻はテレビが倒れないよう押さえていて、怖がっていた。カーラジオで「高さ6メートルの津波」と放送していたため、間野目さんは同居している82歳の母親と妻に、高台にある本家に避難するように指示した。そして飼っていた二匹の犬をランドクルーザーに乗せて、高台にある自宅の方向へ避難を開始した。二匹とも地震におびえて怖がっていた。

車で逃げる途中、消防署の車が「津波がもうすぐ来る。大至急逃げてください」とアナウンスしながら猛スピードで

走っていた。

高台の公園に上がると、海の間野目さんは津波が海岸に押し寄せる様子をデジタルカメラの動画で撮影し、後日、映像をブログにアップしたところ、たくさんの人からアクセスがあった。

前の年の平成22年2月にチリ地震で津波警報が出された時、山元町ではホッキ祭りの最中だった。間野目さんは交通指導員でそのイベントの警備に出ていたため、津波情報とともに参加者を帰宅させた経験がある。その時は警報から1時間後ぐらいに川の水位が上がったが、わずかな上昇だった。「津波ってそんなものだ」という感覚があった。いくら津波が来ても、防波堤を越えてまでは来ないだろうと思っていた」

ところが間野目さんが高台



に上がると、最初に見えた津波は防波堤ぐらいの高さにま  
でなっていた。そして第二波  
は防潮林を超える高い津波。  
「津波っていうと水の波だと思  
っていたが、実際に来たのは  
大きくて高くて黒い水の壁  
だった」と間野目さん。

自分の工場付近にも津波が  
来ているのが分かったが、工  
場もコメの乾燥場も絶対に残  
るだろうとその時は思ってい  
た。自宅のある高台方向にも、  
里山をぐるつとまわりこむよ  
うな形で50〜60センチの津波  
が押し寄せてきた。

### 信じられない光景の中に 自分の工場が埋もれていた

その夜、高台に避難してき  
た人は、近くの民家に避難し  
たり車中泊で過ごした。外で  
火を焚いて朝まで過ごす人も  
いた。間野目さんは家の中に入  
って夜を過ごすのは危険だと  
判断して、車の中で犬と一  
緒に一晚を過ごした。

朝になっても浜のあたりは  
まだ水が下がっていなかった。  
自宅から車を出そうとしたが、  
がれきでいっぱい車を出せ

る状態ではない。周辺を歩い  
てみたが水は完全には引いて  
おらず、自分の工場の近くま  
ではいけなかったが、海側は  
信じられない光景が広がって  
おり、自分の工場の柱も壁も  
見つけることはできなかった。

この日、妻と母親に連絡が  
取れた。二人は避難所に避難  
しており、娘二人も無事が確  
認できた。間野目さんはその  
夜も台所にあつたうどんなど  
を食べ、犬と一緒に車中泊を  
した。

震災から5日目、少しずつ  
がれき処理が進み、自宅から車  
を出せるようになった。避難所  
ではインフルエンザやかぜが  
はやっており、高齢の母親のこ  
とを考えると、民間のアパート  
などに早く移った方がいいと  
判断。友人知人に問い合わせを  
していたが、整備工場のお客さ  
んの関係で、東京の大家さんで  
貸してくれる人が見つかり、震  
災から10日目でアパートを決  
めて入居した。

### 周りからの励ましがあって 事業を再開できた

「あの時は、どうしていいか  
分からなかった。会社も壊れ  
たし、農家もダメになって収  
入がゼロになった。借金しか  
残っていない状態。仕事自体  
がなくて、本当に落胆した。  
3000万円のリースも、住  
宅資金も、仕事があるから返  
せると思っていたから……。で  
もその時に友達のアドバイス  
が心強かった」

落ち込む間野目さんに友人  
は「こういう状態になってい  
るのは間野目さんだけじゃな  
いよ。みんな一緒なんだから。  
とにかくいろんな情報を収集  
して、対策を取ろう」と励まし  
てくれた。この一言で立ち直っ  
た間野目さんは、震災後5日  
目で、手書きでチラシを作成  
し、知り合いや地域の人、出  
会った人に配って回った。チ  
ラシには震災後も仕事を続け  
ること、連絡先などを書いた。

それから2か月。同級生の  
友人から聞いて、工場場所  
を確保した。中古の機械を借  
りて設置すると、友人たちが  
次々に来て、工場の壁を整備  
してくれたり、室内の備品を

寄付してくれたり、いろいろ  
と協力してくれ、事業を再開  
することができた。交通指導  
員とともに活動している仲間  
も時々立ち寄っては、励まし  
たり支援したりしている。

「本当に困っているときに  
『人柄が分かる』というが、本  
当にそうだと思う。自分が困っ  
ているときに協力してくれた  
友だちのことは本当にありが  
たかった。自分も元氣を出し  
て、今後も山元町民のために  
活動していきたい」



機区内の様子(2012.11)

## 被災者に聞く — その時、私は —

道路や側溝、がれきの中も  
震災から二か月、毎日探し続けた

たかやま  
高山 一男 さん (中浜区)  
いちお  
なかはま



その時は津波が来るという  
情報も発想もなかった

中浜地区住民の高山一男さんは震災当時、巨理町の北部にあるJAみやぎ巨理の逢隈支所で農機具の修理サービス事業を担当していた。発災当時、整備工場の中で作業をしており、揺れが大きくなると

同時に他の5、6人の職員と一緒に建物の外に出た。しばらく携帯電話のワンセグでテレビを見ていたが、家族が心配になって、電話を掛けた。初めは携帯電話にかけたがつながらない。自宅の固定電話に掛けると電話がつながり、妻が電話に出た。長女と、里帰り

出産で戻っていた次女、生まれたばかりの次女の子どもと一緒にいて、家の片付けをしているというような話をしてきた。「農協も早く終わると思うから、早く家に帰るから」高山さんはそう言っていて電話を切った。その時、津波が来るという情報も発想もなかった。

「電話を切った後で、津波発生の情報が入った。高さは6メートル。これはまずいな」と思って慌てて掛け直した。携帯電話は娘と妻とで3台、さつきまでつながった固定電話もある。しかし今度は全く通じなかった。あれだけの地震なのに津波発生まで頭が回らなかった。『逃げる』と一言言えばよかった」

巨理町から山元町に車で戻ったが、道路はかなり渋滞していた。巨理駅の東側の農道を通って、いつも通勤に使っている裏道を自宅に向けて車を走らせた。高速道路の下に

差し掛かると、すでに水が来ていて、慌てて引き返して国道に入ろうとしたが、こちらでも渋滞していて入れない。なんとか坂元まで戻り、自宅の一番近いところと思い旧国道の近くまで行ってみたが、周囲は冠水していてがれきの道になっていった。仕方なく、近くの会社の駐車場に車を止め、山の中の道を歩いて自宅に向かった。

だいたい1キロぐらい山の中を歩いていくと、山の方に避難していた隣の家の4人とばったり会った。まだ暗くなっていなかったため、高山さんは家族の確認で自宅に向かったが、家のあった場所は津波で流されて更地のようになっていて確認できない。家族は山の中に逃げているのではないかと探したが見つからない。車も見当たらないので「車で避難した可能性もあるな」と思った。

山に避難してきた隣家の4人のうち、お年寄りが2人で、その1人が全身ずぶ濡れて腰を抜かしたようになっていた。高山さんが背負って避難所まで運ぼうとしたが、あまりの重さに背負うことができなかった。他の人と2人で肩を貸して、坂元中の方に運んだ。坂元中は途中の道は冠水していたが、建物自体は高台にあったために大丈夫だった。

### 避難所を探し回ったが見つからない

「親戚のところに避難しているかもしれない」と、親戚回りをした。津波が来ないような場所にある親戚を2軒回ったが、来てはいなかった。避難所になった支所も回ってみたが、いなかった。知っている人に会えば、「うちの母ちゃんたちを見ましたか」と何度も聞いた。「どうも見えないですね」と言われるたびに落胆した。それでも、「何とか避難しててくれれば」と願った。

回るともう夜で、「ここに泊まっていけ」と言われて一泊した。

搜索を始めてから1週間後。個人タクシーの運転手をして、いる弟の運転で、遺体安置所を回ったり、自宅周辺を搜索していたが、遺体安置所になっていた角田市の旧女子高校に貼られた写真の中に、妻と娘がいることが分かった。「おらの母ちゃんがめつかったのが、ずっと上った上流部の多摩川電線の東側で中浜小学校に下がる道路の南側。道路の手前で次女、中浜の中心部にある生活センターの西側で長女がそれぞれ見つかった。でも孫がまだ見つかっていない」。震災から2か月、毎日探し続けた。道路や側溝、がれきの周辺。山の中に残ったがれきの間も探し続けたという。

高山さんの自宅は、中浜地区でも山際で、JRの線路よりやや高台になっていた。津波がそこまで上がってくると、いう考えは浮かばなかった。後日、津波は膨れ上がるように山裾を駆け上がり、山にぶつかって波が大きくなり、中

浜小学校の天井まで押し寄せたというのが分かった。「おらの母ちゃんも娘たちも、『家の周りには道路があるし、鉄道あるし、ここまで超えては来ないだろう、二階に上がっていたら助かるだろう』という事で逃げなかつたんだらうと思う」と高山さん。

### 何もかも流されてしまったけれど、希望を持って再建を進めて行きたい

親戚の家などで避難生活を送った後、8月1日から仮設住宅に移って一人暮らしを始めた。現在も時々、娘の夫たちが寄ってくれるという。

高山さんは生まれも育ちも山元町中浜。震災前は自分も畑や田んぼをやっていたが、農機具類も流されてしまい、土地も塩害でできなくなった。

高山さんの今の願いは、早く除塩が進んで、田んぼや畑がまたできるようになること。それから、自宅の再建。新坂元駅の周辺で、土地のかさ上げをして住宅再建を進めるという案が提示されたが、震災前の広い自宅と広い田畑を考えると、100坪の土地はあま

りにも狭い。「土地の開発にどのぐらいの時間と予算がかかるか分からないし、安全・安心というけれど、以前は木も家もあつたのにあそこまで津波がきた。家と同じ場所に作るのではなく、もつと上の方に作つた方がいいのではないかなかなか進まない自宅再建に心が揺れる。

早く自分の広々とした家を持ち、農業をまたやりたい。それが高山さんのこれからの希望になっている。



中浜区内の様子(2012.11)

## 被災者に聞く ― その時、私は ―

夫の遺志を継いで  
息子がイチゴの仕事を始めました

発災当時はイチゴの出荷最盛期。イチゴ農家の作間勝子さんは作業場でイチゴのパック詰め作業をしていた。大きな揺れで立っていられず、床にしゃがみ込んでしまった。揺れが収まると畑に出ていた夫が戻ってきた。夜勤明けで寝ていた息子も起きてきた。

「その時も津波っていうのは全然分からなくて。それでもどこから津波が来るって聞いたようでした」

**一旦家族が集まった後  
それぞれに避難したけれど**

夫は消防団の分団長の経験もあり、母を文化センターの



避難所に送るために軽トラックに乗せて出かけて行つた。作間さんは実家の母を迎えに、夜勤明けの息子は2人の孫を小学校に迎えに行つた。その後、母を避難させた夫、実家の母を乗せた作間さん、そして孫を連れた息子がなぜか全員自宅に集まった。

「地震から30分も経つてなかつた頃じゃなかつたかしら。消防のポンプ車のようなものが『避難しなさいよ』と走つて行つたようだった。もうちょっと過ぎてから、近所の人か誰かから『大きい津波が来る』って聞いた」

そこで急いで避難のために車を走らせた。一人乗つて先頭を走つていた夫の軽トラックが路肩に急停止した。「隣の人に声を掛けていくから。先に行つてる」道を譲つて、先に避難を促した。これが夫との最後の会話になった。

さくま  
作間  
かつし  
勝子  
さん  
(新浜区)  
しんはま

作間さんが文化センター付近に着いたとたん、そこに居た人から「もうちょっと上にあがれ」と大声で言われた。高台に上がると、たくさんの人が海の方向を見ていた。作間さんは、ほとんど後ろを見ないで避難してきたため、そこで初めて、高い津波が海から来ていることを知った。避難の途中では、津波の気配も、音も聞こえてはこなかった。

息子に何度電話しても連絡が取れない。そのまま一晩過ぎして、明るくなると、息子が孫2人を連れて避難していた真庭グラウンドに来てくれた。「お父さんと全然携帯がつかない。孫を置いていくから面倒見ている」そういつて夫を探しに出かけて行つた。

真庭グラウンド脇の区民会館が避難所となった。夫のことが頭から離れないが、それでも作間さんは炊き出し班に

入り作業を手伝った。5、6人ぐらいのチームを組んで、交代で朝、昼、晩とご飯を炊く。真庭区民の人たちもコメや野菜などを持ってきてくれて、ありがたかった。

夫が行方不明のまま、息子たちが捜索を続けていたが、3月27日、角田市の遺体安置所の写真で夫が発見された。その日、仙台の遺体安置所に行くためにバスに乗った作間さんを引き戻すかのようになり、バスの中で息子からの電話を受けた。

「主人も消防団やっていたりして、津波が来るっていうのは分かっていたと思う。『まずは逃げろ』って私たちに言ってくれたから……」作間さんは涙を浮かべた。

5月下旬まで真庭の区民会館で避難生活を送り、その後仮設住宅に移った。長男夫婦は岩沼市に土地を買って家を建てたが、作間さんは住み慣れた山元町を離れる気持ちにはならないという。温暖な気候で暮らしやすく、友人も親戚もいる。

避難生活のことを振り返りながら作間さんは「避難所でワイワイやっていたのが良かったかもしれない。気が紛れるって感じだね。借り上げアパートで一人でポシャッと落ち込んでいたらどうなっていたか……。同じ地区の人たちもみんな真庭の避難所について、一緒に布団並べてね、隣で眠っていたから。一緒だったから」避難中の地域の人の励ましが温かかったという。

### イチゴの仕事を始めると 息子が突然言い出した

それまで夫と二人でやっていたイチゴづくりだが、震災後、下の息子が、山元でイチゴの会社を始めた。まるで父親の仕事を継いだ形だ。

「息子は震災前は巨理町の会社に勤めていたけれど、震災で仕事場が被災してなくなってしまった。しばらくはダンブカーに乗ってがれき処理の仕事をしていたんですが、仮設に帰ってきた時に突然、『おっとうの匂いがした』って言うんですよ。あぶら臭いような匂いがしたんじゃないか

な。それで『イチゴやる』って。いままでのイチゴも個人経営だったから、息子が会社やるっていうのも全然想像つかなくて、ちよつと不安だったんですけど」まだ息子のイチゴ会社も始まったばかりのため、作間さんは復興組合の方で仕事をしながら、イチゴを手伝ったりしている。

「息子は、私とお父さんが一緒にやっているときでもイチゴの手伝いとかしたことないんですよ。おっきい仕事、例えばハウスかけでビニールを張ったりとかは、やったことあるんですけど」それでも、一緒に仕事を立ち上げた人が経験者で、友だちもたくさんいて、仕事の合間に勉強も重ねてきた息子の姿を見て、「本気でやっているんだな」と感じたという。

作間さんは言う。「イチゴがなくなると、初めてその良さが分かりました。毎日の仕事がこんなにありがたかったのか、って」

震災後、孫が突然「イチゴが食べたい」と言い、母親がスー

パーから買ってきたのを食べさせた。さしたら、「これいらぬやっぱりおうちのがおいし」と言ってくれたという。

作間さんはイチゴの仕事を始めた息子が夫の遺志を継いでくれたような気がして、母親として心配しつつも、気持ちの奥底では「頼もしい」とも感じているという。

一緒に暮らし始めた息子と、新たに始まったイチゴ事業。震災後の希望が少しずつ芽生え始めている。



新浜区内の様子 (2012.11)

## 被災者に聞く — その時、私は —

地域防災の課題を解決して  
安全で安心できる笠野地区にしたい笠野かさの区長 青柳あおやぎ昭勝まさかつさん

「これね、当日かぶっていた帽子です。あとは黒いジャンパー着て、黒いズボン、ズックを履いていました。もう捨ててもいいんでしょうけどね……。でも捨てられないんですよね。あの日は、悪夢としか表現できない一日でした」

避難生活を送る笠野区の区長青柳昭勝さんは、あの日かぶっていた帽子を手に、発災時の様子を語り始めた。

**防災無線を使って  
必死に避難を呼びかけた**

大きな揺れが立て続けに起きたあと、「津波が来るのでは

ないか」という情報をキャッチした青柳さんは、笠野学堂での会合から自宅に戻り、防災無線機を持って50メートル先の笠野区公会堂脇にある防災無線塔に走った。無線塔の下にあるボックスに防災無線機をつないで、必死に避難を呼びかけた。副区長ら三役と消防団員など10人ぐらいが集まっていた。

「避難しろ」「これは異常だ」「町からも避難の指示が出ている」「すぐ高台に逃げろ」

分かりやすいように同じ言葉は何度も繰り返したが、実際には防災無線は地震ですすでに設備が壊れた地域が多く、どの程度伝わったかは定かではなかった。そこで消防隊がサイレンを鳴らして地区を回り、避難を呼び掛け始めた。

午後3時35分ごろ、笠野区公会堂付近から東側の海岸を見ると、八重垣神社の200メートルくらい東側から火の

手上がるのが見えた。

「あつ、火事だ。消防隊が始動しなければいかな」

青柳さんがそう言った瞬間、南方からがれきと一緒に、真っ黒い水の壁が押し寄せてくるのが見えた。消防班長から「全員退避」の号令。津波は時速50キロから60キロぐらいの速さで押し寄せてきたが、車のエンジンをかけていたため、すぐに飛び乗って避難した。一旦は浅生原から真庭方面へ走り、揺れが小康状態になったようだと判断、丘通りから高瀬信号機の東の空き地に車を止めて、4時間ほど待機した。その後、中央公民館南側の広場に移動した。

**甚大な被害を受けた  
笠野区長としての思い**

車中で避難生活を送りながら、副区長、会計などの役員とともに区民の安否を確認した。一方で娘と息子とは携帯

電話のメールで無事が確認できた。1週間前、息子に勧められて使い方を覚えたばかりだったが役に立った。

青柳さんのように役場周辺に避難した人は、役場からの情報を得るのは非常に早かったが、障がい者のいる家庭やペットと避難した人は「他の人の迷惑になつてしまう」と公共施設での集団避難生活を避け、車中泊で避難生活を送っていた。発災直後から多数の人が役場に避難してきたが、役場の建物が耐震構造ではないことが分かり、公民館と歴史民俗資料館に分かれて避難生活を送った。

安否確認の結果、区の住民842人のうち、42人が死亡、2人が行方不明という甚大な被害だった。幸いにも津波流出を逃れたのは19世帯ほど。今までのコミュニティは大きく変化してしまった。

青柳さんの心残りには、地区内で避難を呼び掛けたものの、「自分の家までは津波は来ないだろう」「来るわけではないだろう」と、過去の歴史や経験

があだになつてしまったこと。震災以降、避難を促すための効果的な方法をずっと考えている。

「災害が起きる前に、避難のアクセスをいかに構築しておくかが重要だと思う」

2012年の秋以降、笠野区民の災害時危機管理対策の再検討が始まった。同時に青柳さんは区長として、この震災の教訓を残そうと震災の記録をまとめ始めている。「何か残しておかなきゃいかな、ということだね。残しておくっていうのも、私らの責任ですから」

危機管理対策として、課題に上がっているのは備蓄と物資の供給。緊急時に必要となる毛布や移動のためのガソリンの確保。さらには食事や医療の問題。青柳さんは定年前は食品会社に勤務しており、1978(昭和53)年の宮城県沖地震のときには被災地いち早く食糧を運んだ経験がある。「やっぱりあらかじめ緊急時のシステムを確立しておかないと、いざというときにこのような事態に対応できない。

い。特に食事。一日2食の提供も、燃料や食糧を備蓄しておけば、もつとスムーズに提供できる。システムの準備が非常に弱かった」

また、避難所で過ごした高齢者の中には、持病を持つている人も多く、病院に通えない時期があった。近くの診療所が医療体制を整えたために深刻な問題は起きなかったが、緊急時の対応が課題になった。

### 様々な課題を解決しながら 安全・安心に暮らせる 笠野地区を作っていく

いま、青柳さんは地域の高齢者が集う福祉団体「すみれ会」の会合に顔を出したり、仮設住宅での芋煮会などの行事にも参加して、地域のお年寄りや子どもたちを激励している。青柳さんは、仮設住宅の入居を決める審議会の委員を務めており、高齢者の仮設住宅の入居を巡る課題の解決に取り組んでいる。

現在、JR常磐線の移設などにより、山元町を支えている年代や、将来を担う年代が町

外に流出しているほか、集団移転などの問題も抱えている。「仮設住宅の入居は、高齢者や障害者など社会的な弱者が優先。入居した後の支援がこれからももつと必要になってくる」

この震災と津波被害により、地域の防災の課題が浮き彫りになった。町との連携により、区長として、そうした問題の解決を図り、安全で安心できる新しい笠野地区にしたい。そう考えて、青柳さんは日々奔走している。



笠野区内の様子(2012.11)



## 被災者に聞く — その時、私は —

## 誰かが後ろから近づくと津波が迫っていたのです

やまじ  
山路とし子さん（花釜区）  
はながま

和やかな雰囲気の中  
突然大きな揺れに襲われた

3月11日の午後、山路とし  
子さんは花釜地区の自宅で、  
夫と友人の3人でお茶を飲ん  
でいた。友人は「そろそろ気候  
も温かくなってきていたので、イ  
チゴ摘みを手伝ってほしい」

と頼みに来ていた。3人はイ  
チゴの生育やイチゴ摘みの話  
に花を咲かせていた。

すると突然、和やかな雰  
囲気を一蹴する巨大な揺れが襲  
った。山路さんの家は山下駅  
から東に200メートル下つ  
たところであり、揺れが収ま

ると友人は1キロほど離れた  
自宅にすぐ戻った。ふと見る  
と、山路さんの家の前の道路  
から、高さ2〜3メートルぐ  
らい水が噴き上がっている。

とつぎに「断水になるかも」  
と思い、台所にバケツやなべ  
を並べて、夫に水の確保を頼  
んだ。山路さんは花釜行政区  
25班の班長で、婦人防火クラ  
ブ員。その支部長も務めてい  
たため、すぐさま長靴を履き、  
割烹着を着て自転車で乗っ  
て、隣組を回って順番に声を  
掛けていった。「津波が来ると  
は全く想像もしていなかつ  
た」と山路さん。

無我夢中で逃げたけれど  
津波に流されてしまった

自転車で乗って回っている  
と、後ろの方からカタカタと  
音がする。「あら、志賀さんい  
たの？」後ろから近づくと、津波が迫  
り、津波が迫

っていた。カタカタというの  
は物置が流れてくる音だった。  
山路さんは驚いて必死で自転  
車をこいで、山下駅の線路ま  
で無我夢中でたどり着いた。

この時、頭に浮かんだのは、  
7〜8年ほど前に町で開かれ  
た防災講演会で、東北大の今  
村文彦教授が話したこと。「大  
きな地震があったら、山元町  
の高瀬川と浅生原から流れて  
くる大排水と河口付近で4メ  
ートルぐらいの津波が来るだ  
ろう」というような記憶があ  
った。

「今村先生は4メートルと言  
っていた。高台に上れば津波  
に勝てるだろう」後ろから迫  
る津波から必死で逃げながら  
山路さんは高台を探した。

鉄道の線路まで着くと自転  
車を持ち捨て、線路のバラ線  
を自力で超えた。その後も走  
って駅の南側の道路に入って



いったが、しばらくすると津波に流されてしまった。それでも必死につかめるものを探し、東保育所の北側にある木につかまった。すぐ脇には民家があるが、民家の屋根には上がれない。北の方の自転車屋を見ると、車や船やたぐさんのがれきがドツと押し寄せている。

「うわー、うわーって、とにかく驚いて。まだ寒さは感じませんでした」目の前で起きていることが信じられずに、木にしがみついたまま驚くばかりだった。

少し時間が経つと、周囲の様子も分かってきた。東保育所の屋根にいる男性が「寒いから助けてくれ」と呼んでいる。近くの介護施設では、白いカーテンを使って水の中の人を建物の中に引き上げようと救助活動が行われていた。山路さんも「助けてください」と叫んだが、「助けたいけど、助けられない」と言う声が返ってきた。

**死んでる場合じゃない  
お父さんも娘も  
私が探しに行かなくては**

もう首まで水に浸かっていた。「死ぬのかなあ…。死ぬんだなあ」そう思った瞬間、ものすごい寒さが襲ってきた。

すると遠くから、山路さんの方に向けて声が聞こえてきた。「大きな波がまた来たよ。ほら、ちゃんとかまってる」斜め向かいの家のベランダに避難した女性が、山路さんを大声で励ましてくれていた。

「家にいたお父さんも、職場にいた娘も流されてしまったかもしれない」そんなことを考え始めたら気を失いそうになった。

その瞬間、また女性の声が聞こえてきた。「流れてくる棒切れをつかんで、目の前の家の窓を壊して家の中に入りなさい」その声で山路さんは自分を取り戻した。

「お父さんも娘も、私が探しに行かないといけない。死んでる場合じゃない」必死で適当な棒切れを探し始めた。するとちようどいい長さ、重さの木が流れてきた。グツとつかんで窓を叩くと、窓がちようど良く割れた。素手でガラ

スをはがして、長靴を履いた足で何度も何度も窓を蹴つたらガラスが壊れ、家の中に入ることができた。

この家の人は誰もいなかったが、二階に上がると濡れていないベッドがあり、周辺にあつた乾いた服を借りて着替え、ベッド脇のタオルケットを体に巻いた。

余震と寒さで一睡もできないまま朝を迎え、水が引いたのを確認して家から出た。自衛隊を見つけて役場に避難した。「お父さんは亡くなったのだらうか、役場に聞かないと」すると反対側から、夫にそっくりの人が歩いてくる。

「お父さん、お父さんなの？」「何だ、お前、生きていたのか。どこに一晩いたんだ。本当に生きていたんだな」お互いに驚きと安堵の再会だった。

### 災害に対処するためには 訓練を重ねる事が大切

その後山路さんは西石山原の仮設住宅に入居し、避難生活を送っている。

「海岸から1キロも離れているから、もし津波が来ても大丈夫だという気持ちではダメだと思いました。生まれも育ちも山元で、地理や方角が分かったことは避難の時の助けにはなつたけれど、予想を超える津波には対処しようがなかった。防災の知識を得たり避難の仕方について理解したり、普段から訓練を重ねていくことが、とても大切だと実感しました」と話している。



花釜区内の様子(2012.11)

## 被災者に聞く — その時、私は —

突然襲ってきた津波  
渦の中に巻き込まれていった

「山元町の消防の皆さんに私は助けられました。まず最初にそのお礼を言いたいと思います」

このまま死んでしまうのかもしれない—。

そう何度も思ったあの日の体験を、82歳の土生きよみさんは、ゆつくりと話し始めた。

避難の途中で  
車ごと流されてしまった

3月11日、84歳の夫と一緒に自宅にいたとき、激しい揺れに襲われた。間もなくして「避難しなさい」と消防車両が回って避難を呼び掛けていった。土生さんと夫は避難することにした。

何も持たずには逃げられない



はぶ  
土生 ぎよみ さん (牛橋区)  
うしはし

いから、少しのお金が入った鞆を持ち、新しい毛布とダンベルを車に積んだ。夫は、仕事に出ている長男に、何度も携帯電話で連絡を取ろうと試みたが、繋がらなかった。紙に2人で避難する旨を記し自宅に張った。そして、飼っていた三匹の猫が腹を空かせて困らない様に餌を与えて、その後車に乗り込んだ。

ハンドルを握る夫の様子がおかしい。「じいちゃん、どこに行くの!」と大きな声で怒鳴るように声を掛けた。夫は、「津波が来たんだわ。ハンドルが効かないんだ!」と早口で言った。「ああ、流されるんだわ。もうだめだわ。おしまいだ」

そう思った瞬間、車は渦巻きの中を激しく揺れながら回転し、出て行くこうとしていた方角とは全く逆の西側のイグネ(屋敷林)の方へと戻される様に流された。

わずかの間に自宅や倉庫、木小屋は流されビニールハウスも見えなくなった。イグネの杉の木も数えるほどを残し、ほとんど倒され何もかも無くなった…。

このイグネの杉の上に車は引つ掛かる様に乗り上げて止まった。「何だか神様に守られたような感じだった」と土生さんは振り返る。

「じいちゃん。まだまだ大きい津波が来るんだねー。じいちゃん。もつと大きいのが来るんだねえー」車の中で必死の思いで運転席の夫に叫び続けた。

両脇を見ると右も左も大きながれきがたくさん重なっている。それを見た夫は、車のガラスを肘で割り、外に抜け出さず何とかがれきの上に乗って高かった。再び高い津波が来るのとは思い、少しでも高いところへ避難しなければ

と考えたからだ。

土生さんも早く外に出て避難した方がいいのではないかと考えて、車から外に出ようとした瞬間、ズボツと胸まで水の中に落ちてしまった。胸が苦しい。足が抜けない。片手でイグネの枝にぶら下がりがら、イグネの間にはまってしまった足を抜こうとした。

抜けない足を何とかしようと格闘すること1時間半。その間、夫と二人、励まし合いながら過ごした。

「じいちゃん、私が死んでも息子の力になって、何とかやっけていって」そう土生さんが言うと、夫は「何を言ってるんだ、このこぼか者。お前を助けないでいられるか。俺も助からないといけないんだ」と叫び返す。

時間が経つにつれて、次第に濡れている体が冷たくなってきた。その時、ちょうどいい長さの木が流れてきたので、その木を使って車の上に乗ると、再び車内に戻ることができた。夫も車に戻ってきた。

「ああ、助かった。二人とも、

助かった」ホッとすると同時に、猛烈な寒さが襲ってきた。全身ずぶ濡れで、もう周囲は暗くなり始めている。「じいちゃあーん、私死ぬんだわ。寒くて死ぬんだわ」それでも二人で会話しながら、一晩は車の中に泊まった。出る時に積んだ2枚の毛布だけがせめてもの暖を取る手立てとなった。

### 翌日の午後になつて ようやく救助された

翌日の午後3時ごろ、気が付くと上空をヘリが飛んでいた。そこで夫はがれきの上に乗ってヘリに向かって手を振った。ヘリは生存者の確認のために空から調べており、二人がいることが確認された。

しばらくすると「おぼあちゃん、大丈夫かい」という人の声が聞こえてきた。消防の人たちが救助に来てくれたのだ。イグネの上を歩いたり、ヨシヤがれきの上も、約1・5キロぐらい歩いただろうか。途中で消防の人からは「ぼあちゃん、何も遠慮はいらないよ。おぼさつていきな」と言っ

てもらったが、「濡れてて重いから、大丈夫だから」と気丈に自力で歩いた。

その後救急車に乗せられて宮城病院へ。「ぼあちゃん、痛くないかい」看護師に言われてハッと気が付いて足を見ると、足が傷だらけになっていた。無我夢中で水の中から足を抜こうとしたり、もがいたりしたので、足の付け根から下はがれきで傷ついていた。夫も同じ様に手足に傷を負っていた。

病院では玄米のおにぎりをもらったが、総入れ歯のためにはポロポロと口の中からこぼれてしまう。病院では特に薬を飲むわけでもなく、ただ寝ているだけのように感じて、「寝て治るものでもない。何ともならない。せつかく助かってここまで生きているのに、死んではならない」と思ったという。また、差し入れでいただいた食べ物や衣類など、とてもありがたかったと話す。

### 退院した後は 避難所へ仮設住宅へ

約10日後に坂元支所の避難所に移り、その後は、二女の嫁

ぎ先、そして現在生活している仮設住宅に入った。

「全く何もないところからの生活。仮設住宅では当座の生活に必要な物が用意されており、ありがたかった。二女夫婦が引越しにあたり手伝ってくれ、家具も準備してくれた。

たくさんの支援物資を頂きました。ボランティアの方々にもお世話になりました。また、みんな親切にしてくれる。

この間まで手押し車を押してここらあたりを歩いていたら「仮設の隣近所の人がお茶を飲みに来たり、民生委員の人が顔を出したりしていく。

仮設住宅に入って、土生さんは少しづつ元氣を取り戻していった。ただ現在、夫は病院に入院中。夫の体調が今一番気がかりだ。

今、仮設住宅の部屋の壁には、遠方にいる孫たちの写真が飾られている。その写真を眺めながら、「今度はいつ来てくれるかな」と考えるのが、土生さんの今の楽しみになっている。